

## お父さん

地しんのすぐ後に、学校の運動場にひ難しました。

「おばあちゃんの家を見に行こう。」

と、お父さんが言い、二人で走り出しました。板宿を過ぎてから、もう走れなくなりました。屋根のかわらが落ちていたり、たおれてきそうな家もたくさんありました。おばあちゃんは、お母さんのお姉さんと二人ぐらしだったので、余計に心配になりました。けむりくさいにおいもだんだん強くなってきました。

もうすぐで、おばあちゃんの家という所で、ぺっちゃんこの家がありました。そこのおばあさんが泣きながら、

「むすめを助けてください。お願いします。」

とさけんでしました。わたしは、通り過ぎようと思いました。すると、お父さんが、

「これ持つといて。」

と、ひとこと言ってから、わたしにジャンパーを投げて、ぺっちゃんこになった山みたいな家を登って行きました。わたしは、ふさがった道の真ん中につっ立っていました。

「おばあちゃんたちが、死んでたらどうしよう。死なないですよ。お願い。」と思いながらも、どこかで「知らない人なんかより、おばあちゃんたちを助けてよ。」と思っていました。すると、なみだが

急にぼろぼろと出てきました。いつもだったらすぐになみだをふくのに、人にじろじろ見られていても全然気になりませんでした。

「見つかったぞ。」

という知らないおじさんの声で、なぜかうれしくなりました。お父さんが出てきたので、うれしくてほっとしました。

すぐにおばあちゃんの家に行きました。おばあちゃんの家を見ると、屋根が下がっていたので、家にはもういないと思い、千歳小学校へ走りました。体育館の中をさがしたけどいませんでした。すごく心配なので、もう一度、おばあちゃんの家を見ることにしました。すると、おばあちゃんとおばちゃんが、家の中にいました。げん関もつぶれていたので、お父さんが格子戸の板をのけました。出てきてほっとしました。

今回の地しんで、お父さんのやさしさ、たくましさを感じました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。  
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。